

令和5年度 自己点検・評価書

令和6年7月

佐賀大学地域学歴史文化研究センター

I 現況及び特徴

本センターは、教授・准教授各1名の専任教員（うち1名がセンター長伊藤昭弘）を中心に運営されている。スタッフとしてはこの他に学内他部局の併任教員を4名、教務補佐員が1名（年度途中で退職・採用あり）、事務補佐員が各1名在籍し、6人の外部研究者に特命教員／研究員を委嘱している。また、前年度末に退職した講師（研究機関研究員）1名の後任を、採用することが出来た。

組織構成としては、事務のほか、佐賀の地域特性を踏まえた「考古学」・「国文・文献学」・「洋学・思想史」・「地域史・史料学」の4研究部門体制をとり、さまざまな分野・視点から佐賀地域の歴史文化研究をすすめ、地域学の創造を目指す取組みをおこなっている。

II 目的

本センターは、佐賀地域の歴史文化研究を通じ、その普遍性と固有性とを解明する地域学を創造・推進することを課題とし、学内唯一の文系研究施設として、平成18年に設立された。グローバル化に向き合った先駆者、幕末維新期の佐賀を主な研究対象としつつ、歴史文化研究を通じて地域社会から必要とされる学問拠点としての地位を目指している。

当該期佐賀藩の科学史的意義を踏まえ、文理融合型の共同研究も実施してきた。また地域史資料を重視する中でデジタル人文学研究の推進にも関わってきている。

III 教育の水準の分析（教育活動及び教育成果の状況）

分析項目 I 教育活動の状況

ア、全学教育機構におけるインターフェース科目「佐賀の歴史文化」Ⅰ～Ⅳを企画・運営した。

イ、専任教員は、全学教育機構・教育学部・芸術地域デザイン学部における日本史関係科目に出講した。

ウ、小城市立歴史資料館や附属図書館で、附属図書館小城鍋島文庫を中心にした史料を紹介する展示や講演会を実施した（後述する）。

エ、その他にも図書館や公民館等と連携して、社会教育の分野での活動を積極的に展開した。

専任・併任教員による佐賀市立図書館における公開講座「私が教えたい佐賀の歴史と文化 100 分集中講義」を企画・開催した（全3回）。また佐賀県立図書館における古文書講座や、みやき町の歴史発見講座にも出講している。

オ、留学する学生に向けた日本文化講座を実施した。

○優れた点・特色ある点

社会教育の分野で積極的な活動を行っている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
インターフェース科目の提供が減ったことによる、「佐賀の歴史文化」についての志望順位・意欲が高くない学生が履修せざるをえない状況。	インターフェース科目の改革が全学教育機構で計画されている。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

分析項目Ⅱ 教育成果の状況

ア、専任教員の授業アンケートの総合評価は平均的である。

イ、自治体と連携した社会教育活動は、いずれも翌年度への継続が決定している。

○優れた点・特色ある点

社会教育分野での活動実績は、地域から一定の評価を受けていると言えよう。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
対応する教育課程を持たないため、学内での教育活動が、研究者育成・研究との正の相乗効果を発揮し難い。	他部局の教育課程に関わる問題であり、自部局だけでは解決し難い状況が続いている。	☒ 検討中 ☐ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

Ⅳ 研究に関する状況と自己評価

ア、佐賀大学附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」に収められた史料のうち、小城藩のまとまった行政記録として重要な価値を持つ「小城藩日記」について、研究を進めた。小城市教育委員会と共催での特別展「江戸時代の災害と小城」を実施し、図録・史料集も刊行した。記念講演会も実施している。

イ、令和2年度の小城市教育委員会と共催の特別展「小城藩日記の世界」の成果を、図書館

月間に際して附属図書館においてあらためて紹介した。

ウ、県内の博物館等との連携を深め、共同での勉強会を実施し、講演会「佐賀藩の洋書を開く―西洋科学技術導入の現場―」を主催した。

エ、武雄市歴史資料館との共同研究を行い、「地域みらい創生プロジェクト」（開拓・萌芽事業）に採択されて、史料のデジタル化を進めた。

オ、佐賀県立図書館・東京大学史料編纂所と共同研究を行って科研費も獲得し（後述）、シンポジウム「坊所鍋島家文書を読みなおす」について参加・後援した。

カ、特命研究員の研究成果『佐賀学ブックレット⑪ 中野万亀——女性がつなぐ人材育成の系譜』を刊行した。

キ、所属教員や佐賀地域歴史文化に関する学外研究者の成果をまとめた研究紀要第18号を刊行した。

ク、地域史研究部門の研究成果を、『文化文政期の佐賀藩財政（一）』として刊行した。

ケ、デジタルデータベースの更新・追加を進めた。今年度は御状方日記・寺社方抜書・佐嘉御取合記事目録データベースの運用を開始した。

コ、学会発表を進め、論稿の発表を実現した。年度内に公刊されたものとしては、前掲のブックレットや史料集の他、史料集1冊、紀要論文1本、出版社刊行の学術雑誌論文1本、学術書の分担執筆4本が挙げられる（専任教員2名・研究機関研究員1名分）。

サ、科学研究費による研究課題として、伊藤昭弘センター長については、基盤研究(B)「巨大塩田地主野崎家史料の総合的研究」（研究分担者、2019-2023年度）、挑戦的研究(開拓)「社会転換期における地域アーカイブズ全国調査の検証と新たな方法の開拓」（研究分担者、2020-2023年度）、基盤研究(C)「近世初期大名発給無年号文書群の研究資源化―佐賀藩家臣坊所鍋島家史料を対象として―」（研究分担者、2023-2025年度）がある。三ツ松誠准教授については若手研究(B)「国学者西川須賀雄と神道国教化の時代」（研究代表者、2017-2023年度）、基盤研究(C)「佐賀藩神学寮と明治維新一国学者南里有隣の再検討から―」（研究代表者、2023-227年度）、基盤研究(B)「感情体制」と生きられた感情―エゴドキュメントに見る「近代性」―（研究分担者、2019-2023年度）がある。その他、特命教員・特命研究員も科学研究費を獲得している。

シ、国文学研究資料館（基幹研究「十九世紀地域文化拠点の総合的研究―廣瀬家を中心として―」）・国際日本文化研究センター（共同研究「接続する柳田國男」）・国立歴史民俗博物館（共同利用型共同研究「三大考」論争関係資料の調査研究）・東京大学史料編纂所（特定共同研究「近世大名家臣家史料の『読み直し』と研究資源化」）といった、大学共同利用機関法人／共同利用・共同研究拠点における共同研究に参加している。

○優れた点・特色ある点

地域連携を拡大しながら、本学憲章にも掲げられた、佐賀の「豊かな自然溢れる風土や諸国との交流を通して育んできた独自の文化や伝統」に迫る、佐賀に根差した研究を進めている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
外部資金の獲得や外部予算に基づく共同研究の拡大の必要がある。	科研費の申請を専任教員に義務付けるなど、外部資金獲得に積極的に取り組んでいる。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

V 国際交流及び社会連携・貢献に関する状況と自己評価

ア、前述の通り、小城市教育委員会との特別展「江戸時代の災害と小城」を共催し、附属図書館所蔵「小城鍋島文庫」に関する研究成果を、市民に公開した。

イ、上記共催展に伴い講演会を開催した。

ウ、前述の通り、佐賀県立図書館と協力して古文書講座を実施した。

エ、前述の通り、佐賀市立図書館と協力して公開講座を開催した。

オ、前述の通り、みやき町の公開講座に協力し、センターより講師を派遣した。

カ、前述の通り、図書館月間に際して附属図書館に協力し、「小城藩日記の世界」と題する、過年度の小城市教育委員会との共催展の成果を踏まえた展示・解説に関わった。

キ、前述の通り、講演会「佐賀藩の洋書を開くー西洋科学技術導入の現場ー」を開催した。

ク、前述の通り、地域の社会教育施設との共同研究を拡大している。

ケ、ウェブサイトを公開し、センター事業の紹介や研究成果の発表を行った。地域史資料に関するデータベースを運用・公開して市民の利用に供している。SNS (X) も運用している。

○優れた点・特色ある点

地域志向の文系研究センターとして、地域の社会教育施設との連携を拡大することで、佐賀大学の社会連携の一角を担っている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
国際交流に関する実績に乏しい。	リール大学との研究協力に向けて交渉を進めている。	☐ 検討中 ☒ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

VI-I 組織運営・施設・その他部局の重要な取組に関する状況と自己評価

ア、専任教員2名、併任教員4名、講師（研究機関研究員）1名（年度途中で採用）、特命教員2名、特命研究員4名、教務補佐員1名（年度途中で退職・採用あり）、事務補佐員1名というスタッフで、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めた。

イ、各学部から選任された委員、附属図書館長・総合情報基盤センター長など本センターの業務に関わる部局の部局長など学長が必要と認めた委員、本センター長・副センター長・専任教員・部門長により構成する運営委員会を〇〇回開催し、センター運営に関わる事案の審議を行った。

ウ、教育学系の一部として、学系長や学系事務らと人事・予算執行などについて協議しながら運営を進めた。

○優れた点・特色ある点

専任教員2名の小規模部局ではあるが、小規模故の機動性を生かし、センター長を中心とした円滑な組織運営・研究活動に努めている。また他部局から併任教員、学外から特命教員／研究員をスタッフとすることで、専任スタッフの少なさを補っている。

○改善すべき点

改善を要する事項	改善計画・改善状況	進捗状況
外部評価によって、データベースの運用・公開や地域史資料の調査・整理・活用というセンターの事業に高い評価を受けた一方、時限的な組織の在り方が、こうした史資料・データベースの管理・公開という地域社会における本センターのミッションにとって制約になっている、という課題が指摘されている。センターの施設も、文化財を管理するのに必要な要件を十分に満たしていない。	地域におけるセンターのプレゼンスを拡大することで、非時限的な組織の在り方の実現につなげていきたい。	☒ 検討中 ☐ 対応中 ☐ 対応済 ☐ その他 ()

VI-Ⅱ 明らかになった課題等（本学職員以外の者による意見を含む）に対する改善の状況又は改善のための方策

外部評価によって、データベースの運用・公開や地域史資料の調査・整理・活用というセンターの事業が高い評価を受けた一方、時限的で不安定な組織の在り方が、こうした史資料・データベースの管理・公開という地域社会における本センターのミッションにとって制約になっている、という課題が指摘されていたが、この問題は依然として課題のままである。

地域社会への貢献・地域社会との連携事業を増やすことで、地域に求められる研究センターとしての地位を確立し、組織の安定化、恒久化への道筋をつけることが現在の課題である。